論 文

# ベトナム共産党による戦史評価の変化
## ――チャン・ヴァン・チャー著作再発行の意義――

福 田 忠 弘*

## はじめに

ベトナム戦争が1975年4月に終結して，すでに30年以上の月日が経過した。ベトナム戦争は，第二次世界大戦後の世界において，最大の国際的事件のひとつとして歴史に刻みこまれている。しかし，ベトナム戦争の一方の当事者であったベトナムでは，ベトナム戦争という呼び方をしていない。ベトナムは，フランスとの戦争を「抗仏戦争」(Cuoc Khang Chien chong Phap)，アメリカとの戦争は「抗米救国戦争」(Cuoc Khang Chien chong My Cuu Nuoc) と呼び，これら二つの戦争を総称して，30年戦争 (30 Nam Chien Tranh) の呼称を用いている[(1)]。この30年戦争を指導し，ベトナムの完全独立と国土統一を達成したのが，ベトナム労働党 (1976年にベトナム共産党へと改称，現在に至る) であり，30年戦争を勝利に導いたことを正統性の根拠として，一度の政権交代もないまま今なお政権の座についている。

抗米救国戦争は，アメリカとの戦争という側面だけでなく，同じ民族が戦った内戦という側面も持っていた [坪井 2000；坪井 2005]。現在の共産党は，抗米救国戦争を，「北」＝ベトナム労働党と人民軍の「勝利」であったと評価している。ベトナム労働党と人民軍の「勝利」という評価からは，南ベトナムの革命勢力，特にその中心的な役割を果たした南ベトナム解放民族戦線 (Mat Tran Dan Toc Giai Phong Mien Nam Viet Nam[(2)]) および南ベトナム共和国臨時革命政府 (Chinh Phu Cach Mang Lam Thoi Mien Nam) を評価するという発想は出てこない。1975年にベトナム戦争が終結してから，南ベトナムの解放勢力の存在は，意識的，無意識的に無視されてきたのであった。統一後のベトナムでは，南ベトナム解放民族戦線は，北ベトナムで1955年から存在していたベトナム祖国戦線に吸収合併され，南ベトナム解放民族戦線は，ベトナムの公式の場から姿を消し，1998年まで公に解放戦線旗が掲げられることはなかった。

しかし，最近になって，南ベトナム解放民族戦線を見直す動きが出始めている。ベトナム戦争終結後，表舞台から姿を消したかに見えた南ベトナム解放民族戦線は，最近，公の場所に姿を現し始めている。2000年に行われた抗米救国戦争終結25周年の式典には，ベトナム社会主義共和国の金星紅旗と一緒に，金星紅旗と同じデザインだが，旗の上半分は紅色，下半分は青色

＊早稲田大学大学院社会科学研究科 博士後期課程7年（指導教員 多賀秀敏）

の解放民族戦線の旗（二色金星紅旗）が登場した［坪井2000;坪井2005］。また，党・政府に公認された学術団体が発行する雑誌においても，2000年に南ベトナム解放民族戦線特集を組むなどの動きが見られた［CQHKHLXVN］。

出版物に関しても，これまでベトナムで刊行された抗米救国戦争関連の書籍は，党の正しさのみを強調してきたが，南ベトナムの革命勢力について評価する書籍が最近増えてきている。その最大かつ象徴的な事例が，かつて発禁処分となったチャン・ヴァン・チャー（Tran Van Tra: 1919年生まれ，1996年に逝去）の著作の再出版であろう。チャン・ヴァン・チャーは，後述するように，抗米救国戦争中，南ベトナムで戦争の指揮をとっていた。南北ベトナム統一後，チャン・ヴァン・チャーは『鋼鉄のB2戦区の歩み・第5巻・30年戦争の終結』（Nhung Chang Duong "B-2 Thanh Dong", tap V, Ket Thuc Cuoc Chien Tranh 30 Nam）という回想録を1982年に出版した。それは，30年戦争について回想する彼のシリーズの，最後の巻にあたる本だった。彼は最後の巻から書き始め，順に歴史を遡って各巻を執筆する予定だった。チャン・ヴァン・チャーは，中央の正しさのみを強調するのではなく，地方の役割を見直すべきだと主張し，ベトナム国内でも注目を浴びた(3)。しかし，発売2週間後に，ベトナム共産党によって発禁処分にされたのであった。チャン・ヴァン・チャーの抗米救国戦争に対する回想録が，ベトナム共産党中央の「公式」な歴史に反していると評価されたためであった。しかし，抗米救国戦争終結30周年を迎えた2005年になって，発禁の対象となった著作を含む，チャン・ヴァン・チャーが生前執筆した原稿を集めた書籍が，選集という形で再出版され，ベトナムの書店に並べられることなった。この選集には，発禁本のほぼ全文が掲載されているが，多くの箇所に変更が加えられている。つまりは，戦争が終了して30年が経過してなお，ベトナム共産党は抗米救国戦争に対する「公式」な歴史認識を有していて，チャン・ヴァン・チャーの発禁本から削除，改ざんされた箇所は，いまだにその「公式」見解に反するものだと言える。

本稿の目的は，発禁本と再発行本の内容を比較して，発禁本から削除されている箇所，表現が改められている箇所を検討し，この作業を通じて，現在のベトナム共産党の抗米救国戦争に対する「公式」見解を明らかにすると同時に，ベトナム国内における抗米救国戦争に対する「タブー」をも抉り出すことである(4)。

## 第1節　チャン・ヴァン・チャーの生涯と著作

チャン・ヴァン・チャーは，1919年，ベトナム中部のクアンガイ省ソンティン県ティンロン村（xa Tinh Long, huyen Son Tinh, tinh Quang Ngai）に生まれた。17歳（1936年）の時に革命運動に参加し，19歳（1938年）でインドシナ共産党（現在のベトナム共産党）の党員となった。フランス当局に2回逮捕された経歴を持っている。26歳（1945年）には軍隊に入隊し，日本から独立を達成した八月革命に参加した。1945～54年まで，南ベトナムで抗仏戦争を戦い，1951年からは，南ベトナムにおいて軍の副司令を務めた。1954年7月に締結されたジュネーヴ協定によって，南ベトナムで戦闘に従事していたベトナム民主共和国軍は，北緯17度線以北に集結することになり，チャン・ヴァン・チャーも軍隊とともに北ベトナムに移動した。1955～62年

まで，北ベトナムに滞在し，ベトナム人民軍副参謀長，訓練局副主任，軍政学院校長，中央軍事裁判所長を兼任した［BQPTTTDBKQS: 1009］。1958年頃から南ベトナムにおける武装勢力の抵抗が激しくなり，南ベトナム政府軍と武装勢力の間で，激しい戦闘が行われることになった。1959年夏以降，南ベトナムでの武装勢力の軍事訓練のために，南ベトナムから北ベトナムに集結していた軍人を，南に送り返す決定が行われたが，この決定は，チャン・ヴァン・チャーとレ・ズアンが話し合いをもった結果である［Tran 2003: 190-194］。1963年には，北から南へ戻り，抗米救国戦争に参加した。1968～72年まで，南ベトナム解放軍の副司令官，1973年から司令官を務めた。1975年に行われたホーチミン作戦の副司令であった。抗米救国戦争後は，1978～82年まで国防次官を務めた。1996年に77歳で死去したが，ホーチミン大勲章を含む多くの勲章が贈られた，抗米救国戦争の英雄である［BQPTTTDBKQS: 1009］。

チャン・ヴァン・チャーは，抗米救国戦争が終了した後，抗米救国戦争の回顧録『鋼鉄のB2戦区の歩み・第5巻・30年戦争の終結』を1982年に出版した。それは，30年戦争について回想する彼のシリーズの，最後の巻にあたる本であり，1973年のパリ会談から1975年のサイゴン陥落までを対象としていた。南ベトナムで活動していたチャン・ヴァン・チャーは，ベトナム労働党中央の正しさのみを強調するのではなく，地方の革命勢力の役割をも見直すべきだと主張し，ベトナム国内でも注目をあびた。彼は最後の巻から書き始め，順に歴史を遡って各巻を執筆する予定だった。第5巻の「はしがき」では，彼の今後の執筆の予定が明らかにされている。それによると，第1巻では1954年のジュネーヴ会議から1960年の同時蜂起までを対象とし，題名は「平和か戦争か」，第2巻では1961～65年までアメリカが特殊戦争を遂行し，失敗した時期を扱い，題名は「武装蜂起と革命戦争」，第3巻では1965～68年のアメリカの局地戦争の時期を主題とし，題名は「局地戦争」，第4巻では1969～73年までの「戦争のベトナム化」とアメリカ軍のベトナムからの撤退に焦点をあて，題名は「アメリカが逃げ出し，傀儡がひっくり返った」とする予定であった。しかし，1982年に第5巻が出版された直後に，同書は，ベトナム共産党によって発禁処分にされたのであった。この発禁処分に関しては，パリ会談でキッシンジャーと秘密交渉を行った，レ・ドゥック・ト（Le Duc Tho）が関わっていたことが明らかになっている。レ・ドゥック・トは，サイゴンにいる宣伝・訓練，新聞雑誌，出版当局の党の幹部を召集し，この本は最初から最後まで間違いだらけで，事実を正しく書いておらず，著者は自分で自分を持ち上げているという判断を下した。政治総局は，その本の軍内部での流通を禁止し，全軍の図書館からその本を回収する命令を出した(5)。同時に1982年で，チャーは国防次官を引退している。チャン・ヴァン・チャーの見解が，当時のベトナム共産党の「公式」な抗米救国戦争の解釈と適合しなかったことが原因であろう。

チャン・ヴァン・チャーの第5巻は発禁処分になったが，彼はその後も執筆活動を行うことを許されていたようである。1992年には，回想録の第1巻『平和か戦争か』が出版され，2003年にはこの本の新装版が公刊されている。しかし，第2～4巻については，執筆することなく

他界した。

本論文の「はじめに」でも述べたように，現在，ベトナム共産党の抗米救国戦争の解釈に変化が現れつつあり，抗米救国戦争終結30周年の2005年にチャン・ヴァン・チャーの発禁本が一部「修正」され，チャン・ヴァン・チャー『30年戦争の終結』人民軍出版社，2005年（Tran Van Tra, Ket Thuc 30 Nam Chien Tranh, Nha Xuat Ban Quan Doi Nhan Dan, 2005）という本の中に再録された。この本は，チャン・ヴァン・チャーが生前執筆した原稿を集めた選集という形式をとり，総ページ数は1000ページを超える。この選集の表紙には，往年のチャン・ヴァン・チャーの写真とともに，南ベトナム解放民族戦線の旗がカラーで掲載されている。

2005年に出版された選集の目次は，次のようになっている。分量の目安のために，開始ページを章立ての後ろに付す。


| | | |
|---|---|---|
| 第１部　難攻不落の南ベトナム往来 | | |
| 1[6] | 南ベトナム人民の革命の炎は決して消えない | 9 |
| 2 | 艱難困苦の中での南ベトナムの成長 | 22 |
| 3 | 南ベトナムでの人民戦争はどのように始まったのか | 33 |
| 第２部　アメリカと戦った南ベトナム－B2戦区の日々 | | |
| 1 | 平和か戦争か | 115 |
| 2 | 歴史的なアップバックの戦い | 395 |
| 3 | ビンザー：最初の戦闘，決定的な戦闘 | 414 |
| 4 | バーザーの勝利：「特殊戦争」を失敗に追い込む | 430 |
| 5 | １つの戦闘，２つの軍事的技法 | 437 |
| 6 | 申年のテト | 462 |
| 7 | 道を下る | 466 |
| 8 | あるまばゆい春 | 474 |
| 9 | 勝利と勝利についての考察 | 479 |
| 10 | ベトナムに関するパリ協定：帝国主義アメリカの侵略戦争に勝利するための歴史的出来事 | 484 |
| 11 | 30年戦争の終結 | 497 |
| 第３部　生き残った人たちへ | | |
| 1 | 八月革命，私の軍隊生活の始まり | 889 |
| 2 | ホーおじさんと共に歩んだ私たちの世代 | 895 |
| 3 | ホーおじさんの教えを学び，行動する | 917 |
| 4 | 南ベトナムの戦士は，ホーおじさんを限りなく愛した | 926 |
| 5 | 一生の幸福 | 934 |
| 6 | 人民の心の強さ | 953 |
| 7 | 人物と歴史 | 958 |
| 8 | Ｄ戦区へ戻って | 965 |
| 9 | ビエンホア，私の町 | 973 |
| 10 | ゴムの木が生い茂る地域，戦略地帯 | 982 |
| 11 | ロンアン：義士の土地 | 991 |
| 12 | 10年：ズエンハイとズンサック再訪 | 999 |
| 13 | 1975年と新しい時代の軍政に関する省察 | 1012 |
| 14 | 発生しなかったはずの戦争 | 1024 |
| 15 | 生き残った人々への手紙 | 1041 |


第１部は抗仏戦争についての回想録，第２部は抗米救国戦争についての回想録，第３部はエッセイからなっている。この選集のなかで，第２部１の「平和か戦争か」が，回想録の第１巻の再録，第２部11の「30年戦争の終結」が，発禁処分になった回想録の第５巻に対応するものである[7]。また，回想録の第２～４巻にあたるところに，チャン・ヴァン・チャーが生前執筆した論文が組み込まれているが，それぞれの論文は独立した性格をもっている。

## 第2節　発禁本と再出版本との内容分析

1982年の発禁本と2005年の再発行本を比較分析して，1982年の発禁本で削除，修正，改ざんされている箇所を明らかにすることにより，現在のベトナム共産党の抗米救国戦争についての認識を明らかにすることが本稿での目的である。サイゴン陥落をもたらした一連のホーチミン作戦の司令官を務めた，ベトナム人民軍総参謀長ヴァン・ティエン・ズン（Van Tien Dung）が，ホーチミン作戦についての回想録を1976年に出版している［バン 1976］。ヴァン・ティエン・ズンの回想録は，党の指導の正しさを強調し，現在まで続くベトナム共産党の「公式」な歴史認識のものである[8]。ヴァン・ティエン・ズンの回想録の記述と，チャン・ヴァン・チャーの回想録の記述の相違などについても，本論文では分析対象の範疇に入れる。

発禁処分の対象となったチャン・ヴァン・チャーの回想録の第5巻の内容は，1973年に締結されたパリ協定から，1975年4月30日に旧南ベトナム政権の首都であったサイゴンが陥落するまでの時期を対象としている。発禁本の章立ては，そのまま再出版本にも引き継がれている。それは，以下のとおりである。

| | |
|---|---|
| はじめに | |
| 第1章 | 新しい戦線 |
| 第2章 | ただ暴力革命あるのみ |
| 第3章 | 協定に違反したものへの処罰 |
| 第4章 | いまだかつて経験したことのない雨季 |
| 第5章 | 新しい段階はこのようにして始まった |
| 第6章 | 総攻撃と春季蜂起 |
| 第7章 | 勝利を決めた戦略：歴史的なホーチミン作戦 |
| 第8章 | 一つの制度の終焉：ホーチミン作戦の勝利 |
| 終章 | サイゴン軍管区へ入る |

発禁本を再出版本に再録するにあたり，発禁本の内容の修正[9]，改ざん[10]，削除[11]が行われている。これらの点について，以下，検討を加えていく。

### 1　改ざんされている箇所

再出版本において，改ざんされている箇所は一箇所のみである[12]。それは，南ベトナム政権の首都であったサイゴンが陥落した時の記述である。周知のように，1975年4月30日に，南ベトナム政権があった大統領宮殿（現，統一会堂）の正門から戦車が突入し，北ベトナム兵士が金星紅旗を掲げた。その後，当時のズオン・ヴァン・ミン（Duong Van Minh）大統領が，南ベトナム政府軍へ戦闘停止の命令を出し，30年戦争も終結を迎えた。この時，旧大統領宮殿の正面から戦車で突入したのが，ベトナム人民軍第2軍団に属する203戦車旅団，および特殊部隊の116連隊であった。

当初の予定では，203旅団はドンナイ（Dong Nai）省において歩兵部隊と合流し，その後サイゴン市内に入ることになっていたが，歩兵部隊の到着が遅れていた。先に合流地点に到着した203戦車旅団は，116連隊と遭遇した。チャン・ヴァン・チャーの発禁本では，この時，203旅団の旅団長と116連隊の連隊長が，歩兵の到着を待たず，自分たちの判断だけでサイゴン市内へ入ることを決定したことが記録されている。その後，203旅団と116連隊がサイゴン市内に入り，大統領宮殿に突入し，「政権移譲について話し合うために，あなた方を待っていた」と

話す，南ベトナム大統領ズオン・ヴァン・ミンに対して，ベトナム人民軍兵士が無条件降服を迫る場面が描写されている。

再発行本では，上記の部分が改ざんされ，以下のような記述になっている。4月30日の朝，ベトナム人民軍の進攻の様子を知ったズオン・ヴァン・ミンが，ラジオ放送を通じて北ベトナム側に，停戦・政権移譲について交渉するよう要請する。しかし，同日，ハノイの政治局が電報で軍に対して，「計画通り，引き続きサイゴンに進攻し，最も力強い気勢をもって進軍し，市全域を解放，占領し，敵軍を武装解除し，敵の各級行政機構を解体し，敵のあらゆる反攻を徹底的に粉砕せよ」という指令が出されたことになっている。この電報を受けた南ベトナムにある軍司令部は，「1．各軍団，軍区，部隊は，都市および地方のあらかじめ決められた区域および目標に向けて，迅速に進撃を続けること。2．敵に対し，投降とすべての武器の提出を呼びかけ，佐官以上の将校を捕らえ，集結すること。3．もし敵が抵抗する場合には，即座に攻撃し殲滅すること」を，各部隊に指示したことに書き換えられている。その後，第2軍団に属する各戦車が，大統領宮殿に突入したことが書かれているが，203旅団や他の部隊名についての記述はなく，戦車の車体番号による戦闘の展開が記されている。その後，ズオン・ヴァン・ミンの降伏文書の作成に，203旅団の政治委員が加わったとされている。再発行本では，党の指導性が強調され，発禁本で述べられていた，203旅団の功績，現場の指揮官の決定については明らかにされていない。

チャン・ヴァン・チャーの発禁本においては，政治局や司令部の指示については言及されていない。再発行本において改ざんされた内容は，ヴァン・ティエン・ズンの回想録における記述に極めて似ている［バン 1976: 305-306］。おそらく，ズンの回想録の内容を下敷きに改ざんしたのであろう。また，203旅団の功績についての現在のベトナムでの評価についてであるが，2004年に出版された『ベトナム軍事百科事典』には，203旅団の項目が設けられ，203旅団が第2軍団の先頭を切って大統領宮殿に突入し，南ベトナム政府の高官を逮捕し，ズオン・ヴァン・ミンに無条件降伏の声明を出させたことが記録されている［BQPTTTDBKQS: 621］。軍事的な評価と政治的な評価において，若干の相違があるのであろう。

再発行本での改ざんの意図は，恐らく二つあげられる。第一に，抗米救国戦争の最終局面において，ハノイのベトナム労働党中央が指示を出し，現場の司令部がその指導のもとに，適切に行動したとする，党の指導の正しさを強調するためである。第二に，30年戦争の終結という，最も劇的な場面において，ベトナム国内で唯一の「公式な歴史」を維持するためであろう。ベトナム共産党は，30年戦争を勝利に導き，独立と国土統一を達成したことを，共産党政権の正統性の根拠にしている。そのために，最も重要な局面における党の指導を強調し，その公式見解を維持することを目指したと考えられる。

### 2　削除されている箇所

削除されている箇所は，改ざんされている箇所に比べて多数ある[13]。削除されている箇所は，おおむね以下の3つに分類することが可能である[14]。第一に，当時の政策決定にあたって，ベトナム労働党内部の会議において，意見の相違が

あったという記述が行われている箇所。特に第一書記であったレ・ズアン（Le Duan），ヴァン・ティエン・ズンの南ベトナムに対する情勢認識が提示されているところが削除の対象となっている。この点については，削除されている分量も一番多い。第二に，チャン・ヴァン・チャーが回想録のなかで，パリ会談以後に，当時の南ベトナム政権がどのような方針を取るのかについて分析している箇所が削除されている。削除されている分量は，二番目に多い。第三に，外国に対して批判的な記述がしてある箇所である。この点に関して，削除されている量は一番少ない。これらの点に関して，以下，順に検討を加えていきたい。紙幅の制限から，第一の点を重点的に取り上げる。

(1) 党内部の意見の相違，混乱について

再発行本で削除の対象となっている，党内部の意見の相違，混乱について言及されている箇所は，二つに分類することが可能である。第一に，1973年1月に締結されたパリ協定後に，ベトナム労働党内部で，パリ協定の評価とパリ協定後の路線について，意見の相違，混乱があったことが記述されている箇所である。第二に，抗米救国戦争の勝利を決定づけた春季大攻勢が開始される以前に，南ベトナムにおける軍事目標の策定を巡って，北ベトナムのベトナム労働党中央および人民軍首脳と，南ベトナムの現場で指揮を取っている司令官たちの間で，意見の相違があったことについて明らかにされている箇所である。第二の点については，中央と現場の間の現状認識の相違点，理論と現実との関係をいかに捉えるのかという論点も含んでいる。

まず，第一のパリ協定[15]に関する削除箇所についてである。発禁本の内容は，パリ協定が1973年1月に締結された直後の状況において，ベトナム労働党，南ベトナム解放軍が，パリ協定後にどのような方針を採用するのかを議論するところから始まっている。パリ協定は，アメリカのウィリアム・P・ロジャー（William P. Rogers）国務長官，ベトナム共和国政府のチャン・バン・ラム（Tran Van Lam）外相，ベトナム民主共和国政府のグエン・ズイ・チン（Nguyen Duy Trinh）外相，南ベトナム共和国臨時革命政府のグエン・ティ・ビン（Nguyen Thi Binh）外相の4者によって署名された。パリ協定の主な内容は，南ベトナムにおいて停戦し，アメリカおよびベトナム共和国政府と同盟関係にある外国軍の撤退，停戦と外国軍の撤退を実行・監視するための4者合同軍事委員会の設立，捕虜となった外国の民間人・軍事要員の解放である。このなかでも，4者合同軍事委員会の設立は，南ベトナムでの停戦，アメリカ軍を含む外国軍の撤退の実施，監視を行う，重要な決定事項であった。パリ協定締結以前から，ベトナム労働党，南ベトナム共和国臨時革命政府では，4者合同軍事委員会への参加者をすでに決定し，党中央にも承認されていたが，4者合同軍事委員会が始まる数日前に，チャン・ヴァン・チャーに変更になった。この時の驚きが発禁本において述べられているが，この記述が最初の削除箇所となっている。

1973年10月に行われた第21回中央委員会議では，パリ協定以後の方針が決議された。この会議では，「敵は，協定を実施しようとせず，実際には新植民地主義戦争にほかならない戦争のベトナム化をひきつづきおこない，全南ベトナムの支配をたくらんでいる。このような事態のも

とにおいて，われわれは革命戦争を継続し，かれらを殲滅し，南ベトナムを解放する以外に方法はない」という21号決議が出され，パリ協定に規定されているように，平和的な解決方法を採用するのではなく，革命戦争を遂行し，南ベトナムを武力解放することが決定された。この決議は，ヴァン・ティエン・ズンの回想録でも，「戦局をわれわれに有利に変え，全国の力を前線に動員する原動力となった」と評価されている［バン 1976: 17-21］。しかし，この決定が出されるまでに，ベトナム労働党内部，および南ベトナムの現場においても，相当の混乱があったことが，チャン・ヴァン・チャーの発禁本では明らかにされている(16)。

1973年4月下旬に政治局会議が開催され，パリ協定後の情勢分析が行われ，パリ協定締結後の情勢は，北ベトナムおよび臨時革命政府と南ベトナムのどちらにとって優勢なのかが議論された。この際に，アメリカがベトナムから撤退することについては，党員の間から好意的に評価されている。しかし，アメリカの「戦争のベトナム化」政策によって，南ベトナム軍の装備が強化されたが，この点については，批判の対象となっている。「パリ協定が締結されたのに，なぜ傀儡軍，傀儡政権が崩壊しないのか」，「アメリカは撤退したが，傀儡政権は崩壊せず，さらに強力になっている」，「(パリ協定の締結は)アメリカが敗北を喫する過程でもあったが，傀儡政権が存在し続け，政治・経済・軍事面においてさらに強力になった過程でもある」といった，批判的な意見が出されていた。それらの批判的な意見が述べられている箇所，パリ協定の評価を巡る党内部での意見の不一致について述べられている箇所の一部が，削除の対象となっている［Tran 1982: 50］。

パリ協定の評価を巡る議論は，南ベトナムの現場においても行われていた。南ベトナムでも，パリ協定後の情勢において，南ベトナム政府と革命勢力で，どちらの勢力が優勢なのかという議論が行われた。こちらでも，パリ協定調印以後，アメリカの撤退を評価する一方，南ベトナム軍が強化されたことに対する疑問が表明された。南ベトナムでは，政治闘争，武力闘争，対敵兵工作（binh van）が積極的に行われていたが，パリ協定以後，対敵兵工作を行うのか，敵がどんどん強力になっていくのを目の当たりにして，何もしないでいいのかという意見が出されていた［Tran 1982: 83］。南ベトナムの末端でも混乱が生じ，メコンデルタのミトー省では，上級機関の承認を得ないで南ベトナム軍に対して攻撃をしかけ，ベンチェ省でも，攻撃を仕掛けてくる南ベトナム軍に対して，反撃するという事態が生じていたが，これらの事実も削除されている［Tran 1982: 83］。パリ協定以後のベトナム労働党内部，および南ベトナムの現場が混乱していた事実について述べられている箇所が，再発行本では削除の対象となっている。

続いて，第二の春季大攻勢以前の方針を巡っての，ハノイのベトナム労働党中央と南ベトナムの現場の司令官たちの方針の相違に関する点についてである。ヴァン・ティエン・ズンの回想録では，1975年4月30日のサイゴン陥落に至るホーチミン作戦について回顧しているが，その回想録の第二章（「チャンス到来」）において，1974年12月18日から75年1月8日まで開かれた政治局会議が極めて重要な役割を持ち，この政治局会議の最中に，南ベトナムにおいて，「14号道路－フックロン作戦」が行われ，この勝利が，

「かいらい軍の衰退の新たな一歩を示すもの」であったと回想されている［バン 1976: 30-31］。そして，この勝利の二日後に，レ・ズアンが中部高原，フエ，ダナンを攻撃することを決定したとされている［バン 1976: 31-34］。そして，「（前略）1975年には，敵の不意を打って各地で大規模な攻勢に出て，76年に総攻撃と一斉蜂起をおこなうための条件をつくる。そして1976年に，総攻撃，一斉蜂起によって全南ベトナムを解放するというものであった。この二カ年基本戦略計画と同時に，政治局は，1975年の初めあるいは終わりにチャンスが訪れるならば，ただちに1975年じゅうに南を解放する，というきわめて重要な見通しをたて，その行動方針を予定していた」と，「14号道路－フックロン作戦」の勝利の重要性を強調している［バン 1976: 34］。この後，ベトナム人民軍，南ベトナム解放軍が，中部高原，および南ベトナムの各省での猛攻を行い，サイゴン陥落へと繋がっていく。しかし，チャン・ヴァン・チャーの発禁本では，この「14号道路－フックロン作戦」について，レ・ズアン，ヴァン・ティエン・ズンなどのベトナム労働党指導者達が，最初反対していたことが明らかにされている。

南ベトナムで活動するチャン・ヴァン・チャー達は，1974年12月から1975年にかけて，大規模な軍事作戦を準備していた。それは，メコンデルタでの攻勢を強めると同時に，フックロン省（現在のビンフック省）の省都ドンソアイ（Dong Xoai）を攻撃するという計画であった。この計画のなかでも，ドンソアイにいる南ベトナム軍への攻撃（「14号道路－フックロン作戦」）は，極めて重要な戦略目標であった。74年10月末に，政治局からの電報を受けとったチャン・ヴァン・チャーとファム・フン（Pham Hung）は，11月13日に南ベトナムを出発して，カンボジア東部，下ラオスから9号線に出て，カムロー（Cam Lo），ドンハー（Dong Ha）を通って，北ベトナムの4区を通過して，ハノイに入った。チャン・ヴァン・チャーとファム・フンが留守をしている間は，レ・ドゥック・アイン（Le Duc Anh）が指揮をとった。

この当時，ベトナム労働党中央は，1975年の計画を三段階に分けていた。「1．1974年12月から1975年2月までの期間。この段階では，B2地区はすでに計画が準備されているので，B2地区のみで活動を行う。2．1975年3月から1975年6月までの期間は，全南ベトナムで活動する。3．1975年8月以降は，1976年の活動を準備するための小規模な活動を行う」という計画を持っていた［Tran 1982: 160］。南ベトナムの現場の司令官たちと，ベトナム労働党中央の間で，戦争の方針を巡って，かなりの認識の相違があった。チャン・ヴァン・チャーらが重視していた「14号道路－フックロン作戦」について，ベトナム労働党中央は消極的であった。ベトナム労働党中央の計画では，ドンソアイの北に位置し，14号道路沿いにあるブーダン（Bu Dang：現在のドゥックフォン（Duc Phong））と，ダクノン（Dak Nong）省のザーギア（Gia Nghia）へ，小規模な攻撃を行うのみであった。このベトナム労働党中央の計画に対して，南ベトナムから会議に参加していたチャン・ヴァン・チャーとファム・フンは頑強に反対し，ドンソアイへの大規模攻撃を主張した。結局，チャン・ヴァン・チャーとファム・フンの意見は却下され，1975年は，大規模な攻勢を行わ

ず，メコンデルタにおいては，南ベトナム政府の平定政策に反対し，フックロン省では14号道路沿いの地点で小規模な戦闘を行うことに決定した。この時に，チャン・ヴァン・チャーは，レ・ズアン，ヴァン・ティエン・ズンと会談を持っているが，その内容の一部（特に，ヴァン・ティエン・ズンに関する記述）が削除されている。しかし，レ・ドゥック・アイン率いる南ベトナム解放軍は予定通りドンソアイを攻撃し，南ベトナム軍を撃退し，最終的にはビンフック省全省を解放するという戦果をあげた。この「14号道路－フックロン作戦」の戦果の後も，ベトナム労働党中央は最初の方針通りに，14号道路沿いの都市への小規模攻撃を考えていたが，チャン・ヴァン・チャーの主張により，軍事目標を中部高原に変更したことが述べられているが，再発行本では削除されている。春季大攻勢の幕開けとなる，「14号道路－フックロン作戦」とその後の大攻勢のイニシアティブは，南ベトナムの現場にあったのである[17]。

(2) 南ベトナム政権の戦略分析する箇所

上述したパリ協定に対する削除箇所とも重複するが，パリ協定以後，アメリカ政府の「戦争のベトナム化」政策により，南ベトナム軍の装備が，質量ともに拡充されることになり，この点が，ベトナム労働党内部，南ベトナムで革命を行っているメンバーからの批判の対象となった。

パリ協定以後，南ベトナム政府がどのような軍事行動を行うのかを予想し，対処する必要に迫られ，チャン・ヴァン・チャーらは，南ベトナム政権の戦略分析を行っている。チャン・ヴァン・チャーが，アメリカ軍の撤退を評価し，南ベトナム軍の装備が質量ともに拡充されたが，それらの装備を，南ベトナム軍が使いこなすまでに時間がかかり，空軍と海軍の力が格段に落ちることを予想しているが，こういった箇所が削除の対象となっている［Tran 1982: 60, 70, 86, 88］。これらの箇所に対する削除は，南ベトナム政権の戦略分析を行う際に，どうしてもパリ協定の価値に疑問を提示する結果をもたらすことになるからであると考えられる。

(3) 外国に対する評価の箇所

チャン・ヴァン・チャーの再発行本では，中国，アメリカに対して，批判的な記述をしている箇所が削除の対象となっている。パリ協定の調印に先立つ，1972年2月，ニクソンが訪中し，上海にて毛沢東，周恩来と会談を行い，米中間でインドシナ情勢についての合意が形成された（上海コミュニケ[18]）。ニクソン訪中後，中国から北ベトナムへの武器，弾薬，輸送車などの援助が縮小されたことを，チャン・ヴァン・チャーは明らかにしている。この箇所が削除の対象となっている［Tran 1982: 123］。また，チャン・ヴァン・チャーが中国に対して，「（アメリカ軍が一筆者注）中国に侵犯しなければ，ベトナムで自由に行動して良いという態度を中国の指導者がとり続けなければ，1965年にアメリカは敢えて南ベトナムに軍隊を派遣することもなく，北ベトナムを封鎖することもなかった」と批判している箇所も削除されている［Tran 1982: 125］。また，アメリカに対しての批判的な表現が行われている箇所，例えばサイゴン陥落後にチャン・ヴァン・チャーがサイゴン市民に，「アメリカ帝国主義だけが敗北を喫したのである」といったスピーチを行っている

が，こういった箇所が削除の対象になっている。1986年以降のドイモイ政策によって，ベトナムは全方位外交を行っている。こうしたことが，歴史書の表現にまで影響を与えている原因と考えられる[19]。

## おわりに

本論文では，1982年に発禁処分になったチャン・ヴァン・チャーの著作と，2005年に再発行されたチャン・ヴァン・チャーの選集とを比較分析することにより，現在のベトナム共産党の抗米救国戦争に対する「公式」な認識，および「タブー」を抉りだす作業を行ってきた。

発禁本と再発行本を比較分析し，修正，改ざん，削除された箇所を比較検討した。改ざんされている箇所は，サイゴン陥落の最も劇的な場面に対する記述に対してのみ行われていた。これは，ベトナム共産党の指導の下，30年戦争が終結したという政権維持の正統性をアピールするためだと考えられる。

削除された箇所は多数あるが，紙幅の制限もあることから，以下の３点に限定して，比較分析を行った。(1)当時の政策決定にあたって，ベトナム労働党内部の会議において，意見の相違があったという記述が行われている箇所。ここでは，パリ会談に対する評価，春季大攻勢を巡る，ベトナム労働党内部の意見の相違について明らかにされている箇所が，削除の対象となっていた。(2)チャン・ヴァン・チャーが回想録のなかで，パリ会談以後に当時の南ベトナム政権がどのような方針を取るのかについて分析している箇所が削除されている。これは，南ベトナム軍の戦略分析を行う際に，どうしてもパリ協定の価値に疑問を提示する結果をもたらすことになるためだと考えられる。(3)外国に対して批判的な記述がしてある箇所について削除されている。これは，ドイモイ政策以後の全方位外交が，外国に対する表現にまで影響を与えているためだと考えられる。

チャン・ヴァン・チャーの発禁本で表明された「地方への視点の重要性」という主張は，再発行本でも読み取れる。しかし，パリ協定に対して批判的な意見を表明すること，重要な政策決定にあたって，ベトナム労働党指導者たちが現在から振り返ってみて，過った判断をしていた箇所は削除の対象になっている。特に，レ・ズアン，ヴァン・ティエン・ズン，レ・ドゥック・トなどの指導者についての記述は，削除されることが多い。南ベトナムの現場と北ベトナムのベトナム労働党中央の間に情勢分析に対して，かなりの相違があったことが伺える。こういったことは，抗米救国戦争が終結して30年たった現在においても，ベトナム共産党の「公式」な歴史解釈に反する部分なのである。ベトナム共産党の抗米救国戦争に対する評価は，今後も変っていくことが予想される。そういった変化する部分，不変の部分を見極めながら，現在のベトナムを分析していくことを引き続き行っていきたい。

〔投稿受理日2006. 5. 26／掲載決定日2006. 6. 8〕

注

(1) 本論文では，「ベトナム戦争」，「抗米救国戦争」，「30年戦争」を文脈に応じて使い分ける。

(2) 本来は，「ベトナム南方（南部）解放民族戦線」と訳すのが適切であるが，すでに「南ベトナム解放民族戦線」という呼称の方が一般的になっていると考えて，本論文では「南ベトナム解放民族戦線」と表記する。「南ベトナム共和国革命臨時政府」についても同様である。

(3) 古田元夫は，「ベトナム戦争読書案内」において，チャン・ヴァン・チャーの著作について，「筆者は，ベトナム労働党南中央局の軍事指導者で，B2戦区とは南中央局の管轄下にあたメコンデルタ地域をさす。この回想録は，ベトナム戦争の過程では，党中央が予測もしていなかったような困難な局面にしばしば遭遇したのであり，そのような時に難局を打開するイニシアティブは地方から生まれることが多かったことを指摘し，中央の「正しさ」のみを強調する総括は「官僚主義」であるとした問題作。発売当時は発禁になるが，ベトナム国内での戦争評価見直しの契機をつくった本で，今では国内でも評価は高い」と紹介している［古田 1991: 191］。

(4) 日本人研究者によるベトナム戦争の見直しについては，［中野 2005］の特に第1，2，5章，および［福田 2006］を参照のこと。また，大畠英樹は，国際政治学における古典，ハンス・モーゲンソー（Hans J. Morgenthau）の大著 *Politics among Nations* 全6版を比較検討する作業を通して，モーゲンソーの不変部分，変化部分を検討するという，詳細な研究を行った［大畠 1999］。本稿を執筆するにあたり，その手法を参考にした。

(5) タイン・ティンは，「私の見たところ，チャ将軍の本には，最高指導者の地位にある人々が認めたくない事実が書いてあったために，発禁処分にされたようだ。客観的に見れば，1975年春に勝利をおさめることができたのは，南部司令部とチャ将軍の功績によるところが大きかった。彼は，ほかの人物たちよりも大きな存在だった。1974年12月末のフォック・ロン省［現ビン・フォック省］進攻を早期に準備したのは，他ならぬチャ将軍と南部司令部だった」と述べている［タイン・ティン 2002: 217-223］。

(6) 2005年の選集の目次には，第1部，第2部，第3部以外の項目は，すべて箇条書きで書かれているが，本論文では便宜的に，各項目の前に1，2などの数字を付す。

(7) 2005年に出版された選集に掲載された論文，エッセイの初出が分かっているのは，ごく一部である。第2部9の「勝利と勝利についての考察」は，1993年に南ベトナム解放民族戦線についての回想録，Chung Mot Bong Co（『ひとつの旗のもとに』）からの再録である［CMBC］。また，『ひとつの旗のもとに』に，チャン・ヴァン・チャーは数本の論文を載せているが，選集に掲載された論文は1本のみである。1990年秋にアメリカのコロンビア大学において，ベトナム戦争関係者が集まって，ベトナム戦争について討議した。その際に，英文でチャーの報告書が掲載されているが，第3部14の「発生しなかったはずの戦争」は，この時の報告書からの再掲である［Warner and Luu 1993］。上記の2つものしか，初出が判明していない。この選集に収録された論文の初出を探すことを，今後も引き続き行っていきたい。

(8) 古田元夫は，「ベトナム戦争読書案内」において，ヴァン・ティエン・ズンの著作について，「1975年当時ベトナム人民軍総参謀長であった筆者の，1975年の春季大攻勢の回想。ただし，党中央の判断の「正しさ」のみを強調しているこの本の記述は一面的であるという批判が，その後ベトナム国内でも出ている」と紹介している［古田 1991: 190-191］。ヴァン・ティエン・ズンは，1986年に失脚している。夫人が国営ヴェトナム航空のパイロットたちを使って，タイから金やダイヤモンドの密輸をしていたといううわさが広まると同時に，ヴァン・ティエン・ズンに対しても，「自分一人で南部解放作戦を指揮したようにいっている」との批判が高まったことが原因の一部と見られる［小倉 1992: 242］。

(9) 本論文でいう修正とは，内容に変更を加えない程度の字句の削除・変更・追加，段落分割をさす。例えば，字句の削除の例は，重複する複数の主語の削除などである。ベトナムにおいては，北部，中部，南部ベトナムにおいて，ベトナム語の表記法が若干異なる場合がある。例えば，tan cong と tien cong はともに攻撃という意味を表し，qui dinh と quy dinh は決定という意味を表すベトナム語であるが，再出版本では，tan cong が tien cong に，qui dinh が quy dinh に変更されている。同様に，固有名詞を表記する際に，小文字が大文字に，大文字が小文字に変更されている箇所もある。また，人名を表記する際に，発禁本では，名前だけで表記されている場合が多いが，再出版本では，姓が追加されている場合が多い（例，Hung が Pham Hung と表記される）。このような

変更も修正とした。同時に，意味内容が変更されない程度の形容詞の追加なども，本論文では修正とした。修正は，再出版本全体に対して行われているが，本論文では分析の対象からは除外した。

(10) 本論文でいう改ざんとは，文章の内容が第三者によって意図的に書き換えられ，発禁本の内容と異なっている場合のことをさす。削除され，新たな文章が書き込まれた場合を，改ざんとする。

本論文では，発禁本と再出版本との内容分析を試みるものであるが，改ざんされている箇所，削除されている箇所を表記する際には，以下のような表記方法を使用する。{P14L4-8: P500L19} と表記した場合，{発禁本において削除された箇所：再出版本で対応する箇所} を表す。Pは該当する頁を表し，Lは行を表す。PとLを大文字で表記する理由は，Lを小文字 'l' で表記すると，数字 '1' との判別がつかないためであり，便宜的なものである。上記の表記の場合は，発禁本の14頁の4～8行目に亘って改ざんされていて，それは再出版本では500頁の19行目にあたるという意味である。改ざん，削除が数ページに亘っている場合には，以下のような表記の方法を採用した。{P50L16-P52L19: P545L19}。この場合には，発禁本の50頁の16行目～52頁の19行目まで改ざん，あるいは削除されていて，それは，再出版本では545頁の19行目の箇所に入るべきものであるという意味である。

(11) 本論文でいう削除とは，文書の内容が第三者によって意図的に削除されている場合のことをさす。

(12) 筆者が調べた限りでは，改ざんされている箇所は，{P291L28-P294L8: P838L11-P841L17} のみである。

(13) 削除された箇所は，筆者が比較分析した限りでは，以下の通りである。

第1章については，{P14L4-8: P500L19}，{P35L7-9: P527L5}，{P38L32-35: P531L29} である。

第2章では，{P50L16-P52L19: P545L19}，{P54L21-29: P548L10}，{P57L28-P58L19: P552L9}，{P60L1-P61L9: P553L21}，{P65L5-8: P558L21}，{P70L32-P72L12: P566L5}，{P73L14-20: P567L30} である。

第3章では，{P77L22-25: P573L8}，{P78L13-23: P573L26}，{P78L30-P79L6: P574L5}，{P82L24-P83L27: P578L27}，{P85L11-P86L27: P580L28}，{P88L23-P89L9:P583L13}，{P100L6-12: P598L8}，{P109L4-10: P610L3} である。

第4章では，{P123L2-26: P626L19}，{P125L4-25: P628L8}，{P131L29-32: P636L12}，{P147L21-23: P656L24} である。

第5章では，{P160L12-17: P673L17}，{P164L30-32: P679L6}，{P165L14-23: P679L20}，{P170L12-19: P685L21}，{P171L18-P174L29: P687L3}，{P177L27-P178L11: P691L5}，{P181L1-P183L20: P694L21}，{P184L16-17: P696L2} である。

第8章では，{P306L17-P307L21: P858L8}，{P308L6-14: P859L3}，{P308L26-P309L17} である。

終章では，{P315L1: P865L1}，{P329L13: P884L14}，{P330L10-32: P885L23} である。

(14) また，この分類には入らないが，現在のベトナムの状況を考える上で，極めて示唆的な箇所が削除されている。サイゴン陥落後，チャン・ヴァン・チャーは，サイゴン軍管区人民委員会主席を務めることになった。戦争終結の翌日，チャン・ヴァン・チャーは，サイゴン－サーディン地区の住民に向かって，「サイゴン－ザーディン地区の人民が，自分達の街の完全な主人になった」と呼び掛ける箇所がある［Tran 1982: 329］。再発行本では，この箇所が削除されている。ベトナム戦争後のベトナムでは，北ベトナムによる南ベトナムの併合とでも呼ぶような事態が発生したが，戦後30年が経過しても，サイゴン市民は自分たちの街の完全な主人ではないということであろうか。

(15) 本論文では，パリ協定の成立過程については分析対象から除外した。パリ協定の成立過程におけるベトナム労働党の外交政策ついては，遠藤聡による研究を参照のこと［遠藤　2002; 遠藤　2000; 遠藤 1997］。

(16) チャン・ヴァン・チャーのパリ協定に対する評価と第21回中央委員会議についての見解は，［小倉 1992: 240-249］でも表明されている。「（前略）なぜならパリ協定のあと，ハノイの党中央委員会から，全ての部隊に『米側の支配地域から解放地域へもどれ』との撤退命令がだされ，かいらい（サイゴン政府）軍への発砲は禁止されていた。われわれが確保した地域にいても，サイゴン側へ攻撃をしてはだめだと指令を受けた。ところが，サ

イゴン側は協定を実行しなかった。われわれがパリ協定を厳格に守り続けて勢力の再構成をしている時期を利用し，かれらは攻撃を続行した。解放側は撤退しなければならず，多くの地域がサイゴン側の支配地域となった」と回顧し，また「われわれは，おおきなミステークを犯したといえる。われわれは幻想をいだいていた。パリ協定の調印で，双方が協定を守ると思い込んでいたのだ（後略）」と述べている［小倉 1992: 244-245］。

(17) 「14号道路―フックロン作戦」についての，チャーの見解については，［小倉 1992: 248-256］も参照のこと。また，本稿の注(5)も参照されたし。

(18) キッシンジャーと周恩来の会談，ニクソン訪中に関しては，［毛利 2004; 毛利 2001; 増田 2006］を参照のこと。米中接近のベトナムへの影響については，［増田 2006］の第7章（栗原浩英「米中接近とベトナム労働党：漸進的解放戦略と軍事攻勢戦略との間で」）を参照のこと。また，本稿を執筆している段階で，ジョージワシントン大学の研究プロジェクトにおいて，キッシンジャーと周恩来会談の新たな資料が公開された。1972年6月20日に行われた会談で，キッシンジャーは，南ベトナム政府が共産党政権に取って代わられることを黙認する趣旨の発言をしていたことが明らかになった。*http://www.gwu.edu/~nsarchiv/NSAEBB/NSAEBB193/HAK%206-20-72.pdf*（2006年6月13日取得）。この会談の内容がどのようにベトナム労働党に伝えられていたのか，この会談がパリ会談，南ベトナムでの戦闘にどのように影響を及ぼしたのか，興味が尽きないが，本稿のテーマを越える課題であるため，あらためて別の機会に論じたい。

(19) ベトナムの対外政策については，［白石 2004］を参照のこと。また，周知のようにベトナムは1945年9月に日本から独立を達成するが，かつての共産党の文献には，「帝国主義，ファシスト日本」という言葉が用いられていたが，最近では「帝国主義」，「ファシスト」といった言葉の使用が控えられ，また日本と名指しをさける場合がある。

## 参考文献

日本語文献

遠藤聡（2002），「ベトナム労働党の外交闘争からみたテト攻勢―パリ会談開始との関連で」『国際政治』130号。

遠藤聡（2000），「ベトナム労働党の外交闘争―パリ私的会談（1968～1969年）を中心にして」『東南アジア：歴史と文化』29号。

遠藤聡（1997），「ベトナム労働党の外交闘争と南ベトナム解放民族戦線－パリ「四者」会談実現の意義」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊，43号。

大畠英樹（1999），「モーゲンソー再読：国家再検討の一方法」多賀秀敏編『国際社会の変容と行為体』成文堂。

小倉貞男（1992），『ドキュメント　ヴェトナム戦争全史』岩波書店。

白石昌也編著（2004），『ベトナムの対外関係：21世紀への挑戦』暁印書館。

タイン・ティン（中川明子訳）（2002），『ベトナム革命の素顔』めこん。

中野亜里編（2005），『ベトナム戦争の「戦後」』めこん。

坪井善明（2005），「『半分の満足』のなかで：戦後30年のヴェトナム」『世界』7月号。

坪井善明（2000），「戦後25年を迎えるベトナム」『世界』7月号。

バン・ティエン・ズン（世界政治資料編集部訳）（1976），『サイゴン解放作戦秘録』新日本出版社。

福田忠弘（2006），『ベトナム北緯17度線の断層：南北分断と南ベトナムにおける革命運動（1954－60）』成文堂。

古田元夫（1991），『歴史としてのベトナム戦争』大月書店。

増田弘編著（2006），『ニクソン訪中と冷戦構造の変容：米中接近の衝撃と周辺諸国』慶應義塾大学出版会。

毛里和子，増田弘監訳（2004），『周恩来キッシンジャー機密会談録』岩波書店。

毛利和子，毛利興三郎（2001），『ニクソン訪中機密会談録』名古屋大学出版会。

ベトナム語文献（引用注には各文献の冒頭に付した略称を用いたものもある）

BQPTTTDBKQS (2004): Bo Quoc Phong, Trung Tam Tu Dien Bach Khoa Quan Su, *Tu Dien Bach*

*Khoa Quan Su Viet Nam* (Hanoi: Nha Xuat Ban Quan Doi Nhan Dan).

CMBC (1993): *Chung Mot Bong Co: ve Mat Tran Dan Toc Giai Phong Mien Nam Viet Nam* (Hanoi: Nha Xuat Ban Chinh Tri Quoc Gia).

CQHKHLXVN (2000): Co Quan Hoi Khoa Hoc Lich Su Viet Nam, *Tap Chi Xua & Nay,* so 74B, thang 4.

Tran Van Tra (2005), *Ket Thuc Cuoc Chien Tranh 30 Nam* (Hanoi: Nha Xuat Ban Quan Doi Nhan Dan).

Tran Van Tra (2003), *Nhung Chang Duong "B-2 Thanh Dong"*, vol. I (Hoa Binh hay Chien Tranh) ((Hanoi: Nha Xuat Ban Quan Doi Nhan Dan) .

Tran Van Tra (1992), *Nhung Chang Duong "B-2 Thanh Dong"*, vol. I (Hoa Binh hay Chien Tranh) ((Hanoi: Nha Xuat Ban Quan Doi Nhan Dan).

Tran Van Tra (1982), *Nhung Chang Duong "B-2 Thanh Dong"*, vol. V (Ket Thuc Cuoc Chien Tranh 30 Nam) (Ho Chi Minh: Nha Xuat Ban Van Nghe).

英語文献

Jayne S. Werner and Luu Doan Huynh ed. (1993), *The Vietnam War: Vietnamese and American Perspectives* (New York: M. E. Sharpe).